

ともに学ぶよさを生かした社会科学学習指導の在り方

ーコミュニケーションの活用を通してー

石川 洋一 小栗 英樹 加藤 悦宏

1 はじめに ー研究テーマ設定の趣旨ー

本校社会科では、平成14年度から16年度まで、「『確かな学力』を身に付けさせる社会科学学習の在り方ー学ぶ楽しさを実感できる授業への改善を通してー」をテーマとして3年間の研究をおこなった。ゆさぶり（概念崩し）などの手だてを活用し、生徒が学ぶ楽しさを実感できる授業づくりを研究した。平成14年度と16年度で生徒の意識を調査・比較したところ、「社会科の学習が好きだ」と回答した生徒が大幅に増え、社会科を学習する楽しさの一部を実感させることができたと考えた。^{*1}

だが、意識調査結果からコミュニケーションに関して一つの課題を見出した。それは、社会科の学習が好きな理由として、討論・話し合い活動を挙げた生徒が少なかったことである。生徒は、社会科授業での討論・話し合い活動では学ぶ楽しさを実感していなかったことが分かる。社会科において討論や話し合い活動が果たす役割を考えると、看過できない問題である。

また、授業中の生徒のコミュニケーションの様子にも変化が感じられるようになってきた。具体的には、自分自身の考えや価値観を披瀝することをためらう生徒がふえた。授業中の話し合い活動では、議論に深まりが見られなくなった。生徒同士のコミュニケーションが少なくなり、特に互いの発言を吟味したり、反対意見を述べ合う場面が減少した。

社会科では、討論や話し合い活動は非常に重要である。なぜなら、討論や話し合い活動を通して体験的に学ぶことのできる能力や態度、知識・理解は、社会科の目標に照らしてきわめて重要なものだからである。体験的に学ぶことができるものは、例えば様々な思考力、表現の技能、コミュニケーションに関する方略的知識、民主的に話し合いに参加する態度等があげられる。

これらのことから、社会科授業でコミュニケーションを今以上に活発で中身のあるものにし、そのようなコミュニケーションを活用して社会科の学力の向上を図っていきたいと考え、上記の研究テーマを設定した。

*1 「宇大附属中学校公開研究発表会要項No.49」を参照していただきたい。

2 研究計画

1 研究1年次（平成17年度）1／3

- (1) 社会科学習におけるコミュニケーションの意義・効果などの検討
- (2) 本校生徒の社会科における「討論・話し合い活動」の意識調査の実施
- (3) 研究の方向性の検討と評価方法についての検討

2 研究2年次（平成18年度）2／3

- (1) 研究の焦点化及び授業実践とその評価
- (2) 討論・話し合い活動の質や内容を改善する手だての検討

3 研究3年次（平成19年度）3／3

- (1) 2年次の継続研究（授業実践およびその評価の継続）
- (2) 研究のまとめ

3 研究内容

「1 社会科の特質とコミュニケーション」では、社会科の視点から、コミュニケーションをどう捉えたかを目標、内容、方法の各点から述べる。「2 コミュニケーションで育つ社会科の学力」では、数多くあると思われるものの中から、本校社会科が本年度着目したものについて説明する。「3 生徒の意識調査」では、本年度本校生を対象に実施した意識調査の結果と考察を述べる。「4 実践の方針」では、1, 2, 3を受けて、コミュニケーションを活用した授業づくりの視点を述べる。

1 社会科の特質とコミュニケーション

(1) 社会科の目標との関連

社会科の目標は公民的資質の基礎の育成である。学習指導要領では、社会科の目標の中で、「～前略～国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」と述べている。公民的資質は、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要なものである。公民的資質が具体的にどのようなものを示すのかについては、諸説述べられているところではあるが、この資質の中には他者と情報や意見の交換を行うことや話し合いによって他者と合意を形成していくことなどが内包されている。民主的、平和的な国家・社会を形成するために必要な資質には、適切なコミュニケーションを図ったり、意見・利害の調整を図ったりするような資質が含まれている。このようにコミュニケーションは、公民的資質と深い関連がある。

(2) 社会科の学習内容との関連

社会科の学習内容は、人間の営みを対象としている。人間の営みは様々な相互交流を通して成立しており、その重要な手段の一つがコミュニケーションである。従ってコミュニケーションを通して社会的事象を理解することは有意義であると考えられる。特に公民的分野では、先に挙げた「民主的、平和的な国家・社会」の在り様や、その基本的な考え方を学習するので深く関わりがあると考えている。

(3) 社会科の学習方法との関連

社会科の学習では、話し合い、討論、ディベートなどのコミュニケーションを行う学習活動が従来から行われてきた。また、課題解決型の学習の諸場面においても様々な話し合いがみられる。社会科学学習におけるこうした学習活動の重要性は、社会科が成立した昭和22年の学習指導要領に学習例として示されていることからわかる。社会科の学習はコミュニケーションを学ぶ側面があるとともに、コミュニケーションを通して学ぶ側面もあると考えられる。

2 コミュニケーションで育つ社会科の学力

(1) 社会的事象の見方・考え方

社会科学学習の目的の一つに、見方・考え方を育てることが挙げられる。学習場面でのコミュニケーションは自分の意見や考えを他者に伝えるだけでなく、自分以外の生徒の意見や考えを聞くことでもある。生徒は自分の支持した立場と異なる立場からの意見を聞いたり、同じような意見でも異なる価値観を持った他者からの意見を聞くことで、社会的事象の多面性・多角性に気付いたり、新たな見方・考え方を獲得することになる。コミュニケーションは、社会的事象への思考力・判断力、さらには理解を深めるための重要な手段の一つである。

(2) 情報収集や発信にかかるところ

これは、情報収集（他者の発言から知識や意見を聞き取る）や発信（他者に知識や意見を伝える）に関わる技能や意欲の総体である。社会科学学習におけるコミュニケーションでは、他者に自分の考えを的確に伝えたり、他者からの情報を適切に聞くことが必要である。こうした技能は、社会科学学習のみで育成されたり、社会科学学習を中心に育てられるものではないが、情報収集や発信の技能の習熟を図る機会として有効である。

また、授業でのコミュニケーションは技能をいかした望ましい話し方ばかりとは限らない。生徒が「発言したい」と強く思うとき、その言葉が十分に意を表すことばではないこともあるし、たどたどしい話し方をする場合もある。また、議論は熱を帯びてくると敬体の口調ではなく、日常の言語が使用されやすいこともある。こうした、形式にとらわれずとも自分の思いや考えを言葉に直し、他者に伝えようとする意欲が重要であると考えられる。そしてこうした不十分なことば・表現でもコミュニケーションが成立するために、発言を的確に聞いたり、相手の意図まで含めて理解しようとすることも重要であると考えられる。

(3) 民主的な態度

社会科の学習におけるコミュニケーションは、社会的な問題の解決やよりよい社会の実現をめざす際にも用いられる。こうした学習活動でのコミュニケーションはオープンエンドを目指しているわけではない。解決や実現を目指しある種の方向性を求めることになる。コミュニケーションに参加した生徒の合意形成が求められるのである。合意を形成するには、他者の発言をよく聞きながら、自分の意見との接点をさがしたり、合意できそうな提案を模索したりしなければならない。時には話し合いの論点を整理したり、参加者全員の考え方をまとめながらコミュニケーションをとらなければならない。こうした力は前者同様社会科学学習のみで育成されるものではないが、社会科の目標にある公民的資質を育成しようとする場合、社会科の学習でも行われるべき活動であるといえる。また、こうした活動を通して、民主的な社会のあり方への理解が深まるのである。民主的な社会の運営

にはコミュニケーションが欠かせないものであることも理解させるべきである。

3 生徒の意識調査

社会科の授業で、発表や話し合いをすることについての生徒の意識を知るために調査を実施した。平成17年4～5月に2, 3年生を対象に、質問紙によるアンケート調査を行った。調査内容は次のとおりである。

社会科学習に関するアンケート		
宇大附属中 社会科		
1 下のア～エの下線部に自分のことばで自由に記述しなさい。		
社会科の授業で友人の考えを聞いたり、自分の考えを述べる活動は、社会科を学ぶ上で		
①		なことである。
なぜならば②		だからである。
実際の授業の時、私は〔③ ア すすんで発表している イ 時々発表している ウ 自分からは発表しない〕。①のように考えていながら、実際の自分の行動が③で ある理由は、④		
だからである。		
2 社会科の授業中の活動についてあてはまるものに○をつけなさい。		
(1) 板書をノートに写す	ふつう	おもしろい
つまらない		
役に立たない	ふつう	役に立つ
(2) 調べ学習	ふつう	おもしろい
つまらない		
役に立たない	ふつう	役に立つ
(3) 先生の話聞く	ふつう	おもしろい
つまらない		
役に立たない	ふつう	役に立つ
(4) 友達と討論する	ふつう	おもしろい
つまらない		
役に立たない	ふつう	役に立つ
(5) グループや個人で調べたことを模造紙などで発表する。	ふつう	おもしろい
つまらない		
役に立たない	ふつう	役に立つ

まず質問1から読み取れた点を述べたい。本校生徒の回答では、社会科の授業で友人の考えを聞いたり、自分の考えを述べる活動は、大切で重要であるとする回答が最も多く見られた。主な理由は「いろいろな考え方がわかる」「自分の考えが深まる」「他の人の意見を聞くと発想が広がる」とするものが多かった。

「授業中発表しているかどうか」の問いに対しては「すすんで発表している」生徒は少なく、半数以上の生徒が「自分からは発表しない」と答えた。その理由としては「正解がわからない」「はずかしい」といった内容のものが多く見られた。

次に質問2について述べる。2では、それぞれの活動について生徒が「つまらない」から「おもしろい」、「役に立たない」から「役に立つ」まで、それぞれ5段階で回答させたものを、それぞれ点数化し、どの学習活動がおもしろく、役に立ち、一方どの学習活動がつまらなく、役に立たないと感じているのかを把握することにした。それぞれ得点に従って並べ替えたところ、次のような順になった。

学年ごとに若干のずれは見られるが、生徒がおもしろいと感じている順は「先生の話聞く」「調べ学習」「友達と討論する」「グループや個人で調べたことを模造紙などで発表する」「板書をノートに写す」であった。役に立つと感じている順は「先生の話聞く」「板書をノートに写す」「調べ学習」「友達と討論する」「グループや個人で調べたことを模造紙などで発表する」であった。

これらのことから、本校生徒は社会科学習で討論や話し合うことについて次のような問題があると捉えた。まず第一に、多くの生徒が授業で発表したり、他の意見を聞いたりする学習について「重要」「大切」だと考えているにもかかわらず、「すすんで発表しない」ことである。「正解がわからない」「恥ずかしい」を理由として挙げた生徒が多いことから、発言を妨げる阻害要因を取り除いたり、それらを乗り越えて発言したくなるような教材開発が必要である。第二に、「討論する」学習活動が、それほど楽しかったり、役に立ったりするものだと感じていないことである。質問1の回答、質問2の学習活動の順位から考えると、本校生徒は、発表や話し合いは大切だと考えているが、それ以上に知識が増えたり、理解が深まることを重視していることがわかる。2の調査の「役に立つ」かどうかの順はそのことを示しているものと考えられる。一方別の見方をすると、生徒の社会科学の学力観がいわゆる「正解主義」になっていることも考えられる。正解かどうかかわからない、正解かもしれないがもっとよいもの（他者から支持されること）があるかもしれないと考えてしまうことが、かえって発表しづらいことになっていると思われる。また、討論・話し合い活動を行っても、正解があるならば時間の無駄である、手っ取り早くそれを教えてほしいというのが生徒の本音かもしれない。

4 実践の方針

以上のことから、本校社会科では、コミュニケーションをいかして教科のねらいを達成することに重点をおいて、実践を行うことにした。前述のように社会科の学習では、コミュニケーションする力を育てることとコミュニケーションを通して高まる力の両面があると考えられる。この二つの側面はどちらも重要であるが、教科の目標を踏まえ、後者に力点を置くことにした。そしてこうした力を育てるために、次のような手だてを講じることにした。

- 生徒が自ら討論・話し合いをしたいと思うような教材開発を行う
- コミュニケーションする必要性や意義を理解させる学習を行う

- 生徒が自ら討論・話し合いをしたいと思うような教材開発を行う

まず、授業に討論・話し合いの場面を積極的に位置づけたい。生徒が「是非話し合いの場をもってみたい」「話し合わなければならない」と感じる討論・話し合いの場面を設定することで、コミュニケーションが円滑に行われ、思考力・判断力なども育成され则认为る。生徒が思わず発言したくなるような、学習課題や論題の教材開発をめざす。

討論・話し合いに関する技能を育成する必要性もあろうが、社会科としては「自分の考えを伝えたい」「他の人の考えを聞いてみたい」「意見を交換したい」という場を設けることが重要だと考える。学習スキルの多くは、内容があって初めて機能するものであると考えるからである。こうした教材開発がすすめば、適切に伝える・聞くといった技能もそ

の中で育成されるともいえる。

本校社会科は、技能の習熟以上に生徒ひとりひとりの話し合い・討論活動への参加が重要であると考えている。発言できなくとも、よく聞き、よく考えている、たった一言だけの発表だが、参加者が無視できない一言が言える…そんな学習場面を追究していきたい。

○コミュニケーションする必要性や意義を理解させる学習を行う

コミュニケーションが適切に行われるためには、何のためにコミュニケーションするのか、コミュニケーションするとどのようなよいことがあるのかといったコミュニケーションの必要性や意義を、生徒が理解している必要がある。コミュニケーションの必要性、意義が理解されていなければ、積極的にコミュニケーションしようとはしないであろうし、生徒が無意味だと考えれば、生徒にとって無益な学習活動にしかならないからである。

また、社会科の目標にある「民主的・平和的な国家・社会の形成」にはコミュニケーションが欠かせない。民主主義はコミュニケーションを基盤として形成されるものでもあるからである。民主的な話し合いでは参加者ひとりひとりの発言が十分くみとられる必要がある。社会科学習を通して主に育成していきたいのは、コミュニケーションに関する資質・態度以上に、よりよい社会やその在り方を目指そうとする資質や態度である。

4 おわりに

コミュニケーションに関する技能の育成は重要であるが、そこにとどまってはいけないと考えている。社会科は、内容教科と呼ばれるその性格上、有効に技能を活用できるだけでは教科の目標を達成することはできない。コミュニケーションの内容自体が重要だと考えている。私たちが目標としたのは上で述べたとおり、社会的事象の見方・考え方、思考力が高まるとともに、民主的な議論のあり方について生徒が気づくような話し合いである。こうした話し合いは、社会科の学力を向上させるだけでなく、社会科学習以外の場面での生きたコミュニケーションに資するものと考えている。

また、前研究「『確かな学力』を身に付けさせる社会科学習の在り方ー学ぶ楽しさを実感できる授業への改善を通してー」を通して、私たちは学ぶ楽しさを生徒に実感させることの意義を大変強く感じた。社会科を学ぶ楽しさを実感させ、学習意欲を高めようと教材開発に努めたが、研究はまだまだ道半ばで不十分なものである。今回の研究の中心はコミュニケーションの活用であるが、「学ぶ楽しさを実感させる」という視点を今後も持ち続け、研究をすすめていきたい。

【参考文献】

- ・文部科学省「中学校学習指導要領 解説 社会編」 1999年
- ・文部省「学習指導要領 社会科編（試案）」 1947年
- ・市川伸一編『認知心理学4 思考』 東京大学出版会 1996年
- ・関口一郎編『コミュニケーションのしくみと作用』 大修館書店 1999年